九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国「鏡」説話考

多賀, 浪砂
純真女子短期大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/9788

出版情報：中国文学論集. 6, pp.13-21, 1977-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

中国「鏡」説話考

多賀浪砂

この小論は「鏡」に関する説話群（以後便宜上「鏡」説話と称する）が六朝の中でもとりわけ晋朝と深い関係を有していることから、志怪小説の発生が六朝であることに一つの傍証を加え、かつ隋末唐初頃の作品とされる王度『古鏡記』が、六朝志怪小説から唐代伝奇小説への結節点に位置して如何なる特徴を有しているかについて考察を加えるものである。

一

古来、鏡は「水かゞみ」であり、器の中の水面に容姿を映すものであった。[1] 初め「監」字を用いて表わし、その後、金属の鏡の出現によって「鑑」字を用いるようになる。[2]「鏡」字が文献に初出するのは『荘子』からであるが、[3] その後に書かれた文献にも、多数の「鏡」字を見ることができる。しかしながら、これらの文献に表われるところの「鏡」字はあくまでも「容姿を整える鏡」の用例、及び「古に鑑みて今を正す鏡」という「鑑」字と共通の使用例であって、およそ鏡を神秘なものとしてとらえる用例はない。

初めて鏡を神秘なものとしてとらえる文献は、後漢、劉歆の『西京雑記』である。それには、「漢の宣帝が獄に下るも、身毒国（インド）の宝鏡一枚を身につけていたので、災いから逃れ得た」という話、[4] 及び「漢の高祖が咸陽宮で見つけた方鏡は、人を逆さに映し、又五臓六腑を照らし病気のありかを示す鏡であったが、秦の始皇帝は、その鏡が悪心を見抜くので、鏡で照らしては悪心を持つ宮人を殺した」という話を採録している。[5] ここに初めて、災いから身を守る身毒国の宝鏡、及び五臓六腑を照見する方鏡が文献にあらわれるわけである。

更に後漢、郭憲の作とされる『洞冥記』も「祇国から献上された青金鏡が魑魅百鬼を照見し、本来の姿から逃れ得なくさせる」という話を採録している。[6]

ところで鏡の効用の叙述が集中して採録されている文献は、晋、葛洪の『抱朴子』[7] である。すなわちこの書は「鏡の一種であるところの方諸及び燧[8]を用いて寿命を延ばし、又盲人や病人を治す」という話を載せ、[9] あるいはまた「九寸以上の鏡を用いて、遠方の事、未来の事を知ることができ、又鏡を四枚使うことによって多くの神々に会うことができる」という話を載せ、[10] あるいはまた「この世に永

く生きながらえて化物となった老精も、鏡にはその本性をあらわすから、山に入る道士は九寸以上の鏡を背負って行くのだ[11]」といい、その後に、鏡を使って妖魔を追い払った実例を幾つか載せている。ここに、鏡を道教の道具として信奉する考えが明文化されたと見ることができる。

このほかにも、鏡の神秘性に言及する文献として、晋の王嘉『王子年拾遺記』がある。この書には、「周の霊王の時、異方から玉人石鏡が献上された」という話[12]、「渠胥国から韓房なる異人がもたらした火斉鏡が暗い所を昼のように照らし、又鏡の前で話すと鏡中の影がそれに応じて返事をした」という話[12]、「方丈山という異郷には魑魅を照らし出し、化物の真の姿を映し出す石鏡のようなものがあった」という話[13]などを採録している。ここにもまた異国と、妖魔を見る鏡との結びつきを見ることができる。

更に『搜神後記』には、先に挙げた『抱朴子』の妖魔を追い払った話を受けて、「淮南の陳氏が不審な二女子を見つけて銅鏡を掛けたところ、鹿であったので捕えてほじしにした」という話[14]を採録する。

又、『述異記[15]』には、先述の『西京雑記』の〝方鏡〟の話を受けて「病気のありかを示す仙人鏡」の話を採録している。

やゝ時代を下り、唐初に編纂された『晋書』には〝殷仲文[16]〟及び〝甘卓[17]〟といった人物にまつわるエピソードとして、鏡が未来の凶兆を予言した話を記録している。

以上を総合するに、仮に『西京雑記』が採録する古代説話によれば、前漢中期頃までに、異国から、中国在来の鏡よりは性能の秀れた、その上に携帯可能な鏡が献上された、と考えることができる。

しかしながら鏡を神秘なものとする考えが精神的な意味あいで問題にされるのは、私の見るところ晋からである。すなわち『西京雑記』は漢代に書かれたものとされてはいるが、実は東晋の葛洪により集大成されており、葛洪[18]、王嘉[19]、陶潛[20]といずれも東晋時代の人であり、『晋書』もまた初唐に編纂されたとはいえ、晋そのものの歴史を記した書であり、しかもそこに登場する〝殷仲文〟及び〝甘卓〟なる人物もまた東晋の人である。

これらのことを考え合わせてみると、東晋時代に至って、はじめて鏡を精神的な意味で取り扱い、それに神秘性を付与させる、という考えが生まれて来たのではないかと考える。

二

王度『古鏡記[21]』は、隋末唐初頃、王度なる人物によって撰されたとされる[22]。つまり隋末あたりに通行していた「鏡」に関する説話を集大成して一篇にしたものである。ところで『古鏡記』の取材源となったところのそれら各説話は、すでに第一節で挙げたような「鏡」説話を吸収して成り立っているのみならず、その他の古小説からもかなりな影響を受けている。そこで『古鏡記』九話[23]を内容の上から分類して、

A、鏡が妖魔の正体を現わし殺す話〈第一、三、五、六、七、九話〉

B、鏡が日蝕・月蝕に影響される話〈第二話〉

C、鏡が疫病になった病人を治す話〈第四話〉

D、鏡が荒海を鎮め難波を免れる話〈第八話〉

のような四種に分って考察を加えてみることにしよう。

A、第一話は『搜神記』の中の〈張華と狐〉の話[24]、及び『異苑』の中の〈永康縣の人〉の話[25]から深い影響を受けているように思われる。なぜならば、㈠妖魔が初め人間の姿をして人間世界に近づいてくるところ[26]。㈡武器でないものに、ある象徴的な力を付与させて、それでもって妖魔の正体を現わさせるところ[27]。㈢妖魔と、妖魔の正体を現わさせるものとの間に介在して妖魔を退治する人物を設置しているところ[28]等、このような諸点を見た場合、『古鏡記』第一話は『搜神記』の〈張華と狐〉及び『異苑』の〈永康縣の人〉と相通ずるところが色濃く認められるからである。

次に第三話は葛洪『神仙伝』の〈劉憑〉[29]の話を直接踏襲している。なぜならば『古鏡記』は、『神仙伝』の〈劉憑〉の話における〝護符〟を〝古鏡〟に置換した発想をそのままとっているからである。なお、『古鏡記』には王度なる編者の確固たる信念に基いて〝淫祀宜しく絶つべし〟という主張があり、この点が『神仙伝』と相違するが、このことについては、後程第三節で述べる。

第五話は、妖魔が〝山公〟〝毛生〟と名乗るところが、『搜神記』巻十八[30]において妖魔がやはり〝部郡〟〝府君〟と名乗るところと類似している。

第六話は、村人が恐れて供物を供し、もしそれを供さなければ祟りがあると信じている湖水の神を、鏡で正体を現わさせて殺すという筋書であるが、ここに登場する妖魚、鮫のような化物の源流は確かに古くは『山海経』[31]にまで遡り得るが、直接には『異苑』の〈東郷太湖〉[32]を踏まえているように思われる。勿論この『異苑』の話は、「兵士が湖水の神であるところの〝白魚（妖魚）〟との約束を破り、これを煮て食うと、たちどころに祟りがあって全員溺死する」という話で、いかにも六朝志怪小説らしいところが『古鏡記』第六話とは相違するけれども。

第七話及び第九話は、共に女性に取り憑いた妖魔を退治するという話であるが、このうち第七話は『異苑』[33]に、第九話は『搜神記』[34]及び『異苑』[35]に類似しており、これらを模倣したかの観がある。とはいえ『古鏡記』が道教の書に影響されつゝも、〝古鏡〟に道教の道士の護符や呪を上回る力を付与させているところは、前述の両書と相違するところである。つまり『古鏡記』は道教に出発しておりながら、道士の力を〝古鏡〟よりは一段低い力しかないものとみなしているのである。

B、第二話は、鏡が日蝕・月蝕の影響を受けることと、暗中における輝きの点で薛狹の宝剣に勝るという話である。宝物が暗い所を昼のように照らすという発想は『西京雑記』[36]など六朝志怪小説にも多く見られ、又宝剣の霊験についても『王子年拾遺記』の〈昆吾山〉[37]などの話が見られ、『古鏡記』もそれらから影響を受けていると思われる。

C、第四話は、疫病が流行したが鏡で照らされた病人だけはすぐさま全快した、という話である。これは劉向『列仙伝』[38]の「鏡を研ぐ負局先生なる仙人が、鏡を研ぐ毎に病人の有無を尋ね、病人がおれば薬を与えた」話にその源を発するかと思われる。更に『西京雑記』には「五臓六腑を照見し病気のありかを示す鏡」の話[5]があり、また『抱朴子』（金丹）[9]にも「鏡に置いた露を飲んで生命を延ばす」

話があって、これらも『古鏡記』の第四話に関連あるものと考えられる。又〝鏡精（鏡の精）〟に関しては『王子年拾遺記』の中の「影が答える」[12]を踏まえて更にこれに創作を加え、「鏡の精が夢枕に立つ」という風にイメージをふくらませたものと考えられる。

D、第八話は、それが踏襲したと考えられる先行資料は出ては来ないが、海の荒れる様子を描いたものが『西京雑記』[39]や『漢武故事』[40]に見えること。又河の神の心を鎮めるために、若い女性を犠牲として水に投げ込んだ話が、『史記』[41]や『搜神記』[42]より伺われること。又祖台之『志怪』[43]に「〝桐郎〟という妖魔が水に飛び込んだのと同時に荒海が鎮まった」という話が見えることなどから、それらが渾然一体となって出来たものかと思われる。

三

以上にも見たように『古鏡記』の九話は、いずれも六朝期の古小説から素材を見つけ、しかも「鏡」説話だけでなく「鏡」とは無関係の説話からも大きな影響を受けて、ふんだんにこれらを吸収しながら一つの伝奇風小説として開花させたものである。

六朝期の「鏡」説話における「鏡」は〝妖魔の正体を発く〟だけで殺す力など持っていないが、『古鏡記』になると「鏡」に〝妖魔を殺す〟力が付与される。これは道教の〝護符〟の影響を受けて〝武器でないもので妖魔を殺す〟という発想を取り込んだものと思われる。このことは六朝期のように〝鏡が妖魔の正体を発く〟というだけに終わってしまえば、それは単なる素材を投げ出したに過ぎないので、さらに工夫を加えて、それまでの説話群にストーリーとしての新しい展開を持たせたものと言える。

しかしこのことを更に深く考察するならば次のようなことがいえよう。六朝期の志怪小説は、怪を志すことにのみ興味があり、そのことにのみ専心して筆を走らせている。つまり、いつどこにどのような妖怪変化が現われ、どういう事件を引き起こしたとか、どこそこでこのような不可思議なことが起こったとか、淫祀に無礼を働いた人間がいかなる不幸な目に会ったなどと全て結果のみに関心を持ち、不可解なる事象の本体をなんら解明することなく、現象をありのままに語るところにこそ、六朝志怪小説の特色があるのである。そのため大半の話が正体不明のまゝ終わってしまう傾向を持っている。また、確かに六朝志怪小説においても、博学あるいは強健なる人物によって正体を暴露され殺害された妖怪変化もいる。しかしそれらはその話一話で終わる。妖怪変化を殺害した人物が、更に他の妖怪変化を退治するという話はない。

これに対して『古鏡記』は「鏡」自体は神秘のヴェールに包まれたものではあるが、そこに登場する妖魔たちは、人間に姿を借りている者も、無知な者に供物をねだっていたものも、女性に取り憑いていたものも、全て正体を発かれて殺されるし、登場する妖魔もひとりやふたりではない。それどころか後半になると王勃は古鏡を持って他の地方にまで征伐に出かけて行く。つまりは妖魔退治、淫祀廃絶、もののけ退治と、征伐の旅行記録とでもいうべきものなのである。

例えば淫祀にしても、先に述べたように『古鏡記』の第六話と『異苑』の〈東郷太湖〉とには類似点もあるが、『古鏡記』と『異苑』との明確な相違点は、淫祀を否定することによって祟りを受け

るか否かというところである。

六朝志怪小説にあっても、確かに作品によっては「廟」が必ずしも全て霊験あらたかなものばかりとは言えず、「廟」の実体がたゞ「行商人が便宜上置いて行ったかわへびにすぎなかった」という〈鱣父廟[44]〉のような話さえ採録してはいる。しかしどちらかと言えば、六朝志怪小説は、人間の方が妖魔にやられ、廟に無礼を働いて祟りを受けるような話の方に興味の中心があり、まして古くから村落に伝わり民の信仰を受けているような「古廟」についての本体解明などは決してなされない。例えば『異苑』には〈東郷太湖〉の他にも「古廟」にまつわる説話が採録されているが、大半が古廟を信じなかったり、古廟に無礼を働いたり、古廟の神様との約束を破ったことによって、その人は処罰を受けている。無論、当時の為政者は時にかかる淫祀を利用することはあっても大抵は淫祀を廃止する方向にあったようである。しかし為政者はともかく六朝志怪小説にあっては、妖魔が跳梁しているのと同様、淫祀もまた決して否定されてはいなかったのである。

しかるに『古鏡記』はその〝古廟〟を淫祀だとして〝古鏡〟を用いて正面からぶっつぶしてしまう。これは編者王度の脳裏の中に、淫祀を否定、廃止、廃絶する確固たる考えがあったことを物語るもののように思われる。

また六朝志怪小説においては、妖怪変化と人間とは絶えず勝敗を繰り返している。それ故、六朝志怪にあっては妖怪変化が一きわ濶達にとび回り、妖怪変化全盛の観を呈している。

これに対して『古鏡記』ではそのような妖怪の影が消え、専ら「鏡」の力を借りた人間に妖魔が打倒され、淫祀が廃絶されることに力点が置かれている。すなわち『古鏡記』は六朝志怪小説から唐代伝奇小説への橋桁的作品[45]といわれるにふさわしく、いったん全ての妖怪変化を一ケ所に集めて殺してしまい、それまでの妖怪変化中心の説話から、中唐以後の人間中心の話へと移行する接点として、妖怪の全面否定、淫祀の全面廃止に話の中心を置いている、と見ることが出来る。このことは志怪小説からの脱却であり、伝奇小説へと進歩する第一歩とも受け取り得よう。

四

更に文章構成の上から『古鏡記』を眺めてみよう。

第二節において見たとおり『古鏡記』は、すでに六朝志怪小説から様々の逸話を吸収し、従来独立した話として断片的に存在していたと思われる九つの話を、改めて大業七年から十三年までの一貫した記録として一篇の伝奇小説にまでまとめあげているわけで、それがまだ稚拙な段階であるとはいえ、文章構成力の点で、小説という文学ジャンルが進歩への第一歩を踏み出したことを意味するものである。例えば、第一話に入る前の導入部における王度が古鏡を入手するに至った由来、また第二話と等三話との間に挿入された古鏡の伝来の過程に関する追憶と古鏡の神秘性、及び末尾部における古鏡の亡佚など、これら各部分の話は、例え編者王度自身の純粋な創作ではないにせよ、全体を一篇としてまとめることに大きく寄与しており、王度の構成力を示すものとみなしえよう。

このことは『古鏡記』とほゞ同時期に書かれたとみられる張文成撰『遊仙窟[46]』が、六朝や唐初の韻文・散文の中から取り込めるだけの言葉や文章を吸収しながら、張生と五嫂・十娘との出会いから別

れまでの時間の推移を追って、どうにか一篇としてまとめ上げているところと構文が類似している。すなわち『遊仙窟』の文章は、あるいは晋の陶潜の『桃花源記』[47]より張生が異郷へ入って行く様子を採り入れ、あるいは漢の班固の『漢武帝内伝』[48]より神仙と交わるというモチーフを採り入れ、更には『文選』その他多くの典籍から多数の美しい字句を採り入れて[49]、しかも全体として物語の辻褄を合わせて長文の構成にまで仕上げているが、『古鏡記』も同様な手法を用いているのである。このことは初唐から盛唐にかけて、小説という文学ジャンルが一つの成長期にさしかゝって新しい構文手法の開拓に努めていた当時の様相を示すものだといえよう。

『古鏡記』は鏡の力で妖魔の一々を抹殺していくことに焦点が絞られて語られている。話の一つ一つは互に短絡しているにもかかわらず、この小説は、妖魔折伏、淫祀廃絶という一つのテーマで貫かれており、『遊仙窟』がいろいろな愛の場面を連ねながら、快楽という一つのテーマで貫いている所と文章構成上極めて重なり合う面を持っている。『古鏡記』にせよ『遊仙窟』にせよ、唐代初期に書かれた小説が、六朝志怪とも、あるいは中唐以後のいわゆる伝奇小説とも様相を異にする一つの特徴とも言うべきものをここに呈示していると考えてよいであろう。

ところで『古鏡記』及び『遊仙窟』には、是非ともこの小説を作っておきたいという編者側の内的必要性において、些か欠けるうらみがある。

つまり、晋の干宝『搜神記』はまだ〝父の婢の再生〟[50]や〝兄の蘇生〟[50]に促された内的要求が強いように思われる。確かに干宝の『搜神記』は、まだ今日から考える小説の概念からは程遠く、やはり一種の歴史[51]であり、それも正史からは落ちこぼれた野史である。にもかゝわらず、干宝はその野史にかなりの情熱を傾けて書いているもののようである。たとえそれが伝え聞いた話の集大成であったにしても、そこにはこれを集めまとめあげて後世に残したい。それが如何なる形態であれ、正史から落ちこぼれた人間の経験を記録として書き留めておきたいという作者干宝の情熱がこもっているように思われるのである。

ところがこの点、なんとか後世へ伝達しようとする創作的情熱において、『古鏡記』と『遊仙窟』の編者は些かそれが希薄であるように私には思えるのである。つまり『古鏡記』及び『遊仙窟』には、是が非でも後世に書き残そうとする情熱というよりは、むしろ何らかの事業――それは『古鏡記』中に出てくるように歴史編纂であるかもしれない[52]――の途上にあって、たまたま珍しい話を数多く知ったために、あるいはまた物尽しのヒントになるようなものを多数入手したために、それをそのまま忘却させることを惜しむ気持ちから、これを書き残したのではないかと思うのである。

一方また『古鏡記』と『遊仙窟』は盛唐以後のいわゆる唐代伝奇小説とも様相を異にしている。勿論盛唐以後にあっても、六朝志怪小説とほとんど変わらぬ多数の作品が残存しているわけだが、例えば沈既済撰『任氏伝』[53]、李朝威撰『柳毅』[53]といった作品のように、妖怪を主人公にしつゝも、その中に人間の内面を見ようとするものが若干あらわれてくる。ここではもはや珍奇な妖怪変化に対する興味は薄れ、妖怪にテーマを借りながら、より深く人間の奥深い内面にまで迫ろうとする方向へと変化している。それはまた沈既済撰『沈中記』[53]や李公佐撰『南柯太守伝』[53]が奇なる事件に話柄を借りな

がら、人生への深い思索にまで迫ろうとしているのと同様である。そして更に白行簡撰『李娃伝』[53]や元稹撰『鶯鶯伝』[53]になると、すでに怪異性は完全に消え、創作の志向は専ら人間の内面描写へと向うのである。つまり盛唐以後の中篇小説は一つのテーマに関してその内在する問題を掘り下げ、かくして作品を中篇にまで仕上げているわけである。だから例え『古鏡記』や『遊仙窟』の方が盛唐以後のものよりも長文だからと言って、文学作品として秀れるものとは言いえない。六朝志怪と唐代伝奇とを接続させるにふさわしい、つなぎの話を投入して長文にしているにすぎないからである。従って『古鏡記』が、六朝期の細切説話を長文にするべく貢献した点では、それはそれなりに、やはり過渡期の作品として価値があるが、読者の感銘をより深くするべく、読者の反応を意識する点においては、まだまだ稚拙な作品として位置付けられうるものであろう。

注

(1) 富岡謙蔵著「古鏡の研究」（大正九年丸善会社刊三〜五頁）参照。
(2) 加藤常賢著「漢字の起源」（昭和四五年角川書店刊三五〇頁）参照。
(3) 駒井和愛著「中国古鏡の研究」（一九五三年岩波書店刊七頁）参照。
(4) 宣帝被収繫郡邸獄。臂上猶帯史良娣合采婉転絲縄、繫身毒国宝鏡一枚、大如八銖銭。旧伝、此鏡見妖魅、得佩之者、為天神所福。故宣帝従危獲済。（「西京雑記」巻一）
(5) 高祖初入咸陽宮、周行庫府。金玉珍宝。不可称言。其尤奇異者……有方鏡。広四尺、高五尺九寸。表裏有明、人直来照之、影則倒見。以手捫心而来則見腸胃五臓、歴然無礙。人有疾病在内、則掩心而照之、影則倒見。以手捫心而来則見有邪心、則膽張心動。秦始皇常以照宮人、膽張心動者、則殺之。（「西京雑記」巻三）
(6) 恐らく六朝期のものと考えられよう。
元封中、有祗国献此鏡。照見魑魅、不獲隠形。（「洞冥記」巻一）
(7) 「抱朴子」参照。
(8) 駒井和愛著「中国古鏡の研究」（前掲）第四章陽燧及び方諸の形態。参照。
(9) 其法鼓冶黄銅、以作方諸、以承取月中水、以水銀覆之、致日精、火其中、長服之不死。又取此丹、置雄黄銅燧中、覆以汞曝之。二十日発而冶之、以井華水。服如小豆、百日盲者皆能視之、百日病者自愈、髪白還黒、歯落更生。……（「抱朴子」内篇巻四金丹）
(10) 或用明鏡九寸以上自照、有所思存、七日七夕則見神仙。或男、或女、或老、或少、一示之後、心中自知千里之外、方来之事也。明鏡或用一。或用二、謂之日月鏡。或用四、謂之四規。四規者、照之時、前後左右、各施一也。用四規所見、来神甚多。……（「抱朴子」内篇巻十五雑応）
(11) 又万物之老者、其精悉能假託人形、以眩惑人目、而常試人。唯不能於鏡中、易其真形耳。是以古之入山道士、皆以明鏡径九寸以上、懸於背後、則老魅不敢近。人或有来試人者、則當廟視鏡中。其是仙人、及山中好神者、顧鏡中、故如人形。若是鳥獣邪魅、則其形貌、皆見鏡中矣。……
昔張蓋蹇及偶高成二人、並精思於蜀雲台山石室中。忽有一人、著黄練単衣葛巾、往到其前曰「労乎、道士乃辛苦幽隠。」於是二人顧視鏡中、乃是鹿也。因問之曰「汝是山中老鹿、何敢詐為人形。」言未絶而来人即成鹿而走去。林慮山下有一亭、其中有鬼。毎有宿者、或死或病、……後郄伯夷者遇之。……密以鏡照之、乃是群犬也。……伯夷懐小刀、因捉一人而刺之。初作人叫、死而成犬。餘犬悉走。於是遂絶。乃鏡之力也。……（「抱朴子」巻一七登渉）
(12) 周霊王、……二十三年、起昆昭之台。亦名宣昭。衆天下異木神工。……時異方貢玉人石鏡。此石色白如月、照而如雪。謂之月鏡。……
有韓房者、自渠胥国来。献、…火齊鏡広三尺、闇中視物如昼。向鏡語則鏡中影応声而答。韓房身長一丈、垂髪至膝、……（「王子年拾遺記」巻三）
(13) 方丈山。有池、方百里。水浅可渉。泥色若金。……百錬可為金、色青。照魑魅猪如石鏡。魑魅不能蔵形矣。（「王子年拾遺記」巻十）
(14) 淮南陳氏於田中種豆、忽見二女子。姿色甚美、著紫縞襦青裙、天雨而衣不湿。其壁先掛一銅鏡、鏡中見二鹿。遂以刀斫、獲之、以為脯。（「搜神後記」巻九）
(15) 日林国有神薬数千種。其西南有石鏡、方数百里、光明瑩徹。可鑑五臓六腑。亦名仙人鏡。国中人若有疾、輒照其形、遂知病起何臓腑。即采神薬餌之、無不愈。（「述異記」巻下）

『漢魏叢書』は任昉著とするが、任昉の著か祖冲之の著か、今定かにしがたい。

(16)（殷）仲文時照鏡不見其面、数日而遇禍。……（『晋書』巻九十九殷仲文伝）

(17)（甘）卓。…自照鏡不見其頭、視庭樹而頭在樹上、心甚惡之。其家金櫃鳴、聲似縊鏡、清而悲。……襄陽太守周慮等密承教意、知卓無備、……乃襲害卓于寢、傳首于敦。……（『晋書』巻七十甘卓伝）

(18)『晋書』巻七二葛洪伝参照。

(19)『晋書』巻九五王嘉伝参照。

(20)『晋書』巻九四陶潛伝参照。

(21) 劉開栄著『唐代小説研究』（中華民国三六年、商務印書館刊）二四～三一頁参照。

(22) 劉開栄氏は『唐代小説研究』（前掲）二四～二五頁において、文中子王通の弟、王凝を王度であるとし、『古鏡記』中の王勤を王績と同一人物であるとしている。汪辟疆氏も『唐人小説』（前掲）九～一〇頁において、劉開栄氏と同じ意見を述べているが、段熙仲氏は『文学遺産・増刊一〇輯』（前掲）一一三頁において、王績等と親族関係を持つ王勃（高宗武后期の人）を作者とみる。しかし市川本太郎者『文中子』（昭和四五年明徳出版社）一一頁により、私は、文中子の兄に王度なる人物がいたという風に考えたい。

(23) 鄭振鐸著『插図本中国文学史』第二冊四九五～四九六頁（民国二一年）に従う。

(24) 張華：…於時燕昭王墓前、有一斑狐、積年能為変幻、及変作一書生、…「天下豈有此年少、若非鬼魅則是狐狸。」……華已使人防門、不得出。……謂華曰「……當是致疑於僕也。将恐天下之人捲舌而不言、智謀之士望門而不進深。……」……「……千年老精不能復別。惟得千年枯木照之、則形立見。」……使乃伐其木、血流。便将木帰、燃之以照書生、乃一斑狐。華曰「此二物不値我、千年不可復得。」乃烹之。（『搜神記』巻一八）

(25) 呉孫権時、永康縣有人。入山遇一大亀。……亀便言曰「遊不量時、為君所得。」人甚怪之擔出、欲上呉王。……権命煮之焚柴万車、語猶如故。諸葛恪曰「燃以老桑樹……」……権使人伐桑樹煮之。亀乃立爛。（『異苑』巻三）

(26)『古鏡記』においては「婢」であり、『搜神記』においては「書生」である。これには『異苑』は該当しない。

(27)『古鏡記』においては「古鏡」であり、『搜神記』においては「千年神木」すなわち「華表木」であり、『異苑』においては「老桑樹」である。

(28)『古鏡記』においては「王度」であり、『搜神記』においては「張華」であり、『異苑』においては「諸葛恪」である。

(29)……嘗有居人妻病邪魅、累年不愈。憑乃勅之。其家宅傍有泉水。……中有一蛟枯死。又有古廟。廟間有樹、樹上常有光。人止其下、多遇暴死。禽鳥不敢巣其枝。憑乃勅之。盛夏樹便枯死、有大蛇長七八丈、懸其間而死。後不復為患。……（『神仙伝』巻五）

(30) 呉時…有鬼魅、宿者輒死。……時丹陽人湯応者大有膽武。……問是誰。答云「部郡相聞。」…頃間、復有叩閤者如前、曰「府君相聞。」…応乃廻顧、以刀逆擊、中之。府君下坐走出。…称府君者、是一老狸也。部郡者、是一老狐也。自是遂絶。（『搜神記』巻一八）

(31)『山海経』巻二（芸文印書館 郝懿行『山海経箋疏』）参照。

(32) 東鄉太湖、呉庚申歳、於此有一軍士五百人。将破壇先以酒肉祈神。約令水酒夜夢人云、……得白魚形状非常。小人貪利、剖而治之、見昨所祭餘食、充溢腸内。……一時没溺。……（『異苑』巻一）

(33) 元嘉十八年、広陵下市縣人、張方女道香、……夜有一物假作其壻来云、……道香俄昏惑失常時、有海陵王纂者能療邪疑道香被魅請治之。始下一針、有一顆、……疾便愈。（『異苑』巻八）

(34) 安陽城南有一亭。夜不可宿。宿輒殺人。書生明術数、……乃握剣至昨夜応処、果得老蝎。大如琵琶、毒長数尺。西舎得老雄鶏父。北舎得老母猪。凡殺三物、亭毒遂静、永無災横。（『搜神記』巻一八）

(35) 高祖永初中、……人有嫁女。……女忽然失侘、…巫云、是邪魅、…遂擊鼓以術呪療。…女遂動哭云、失其姻好。於是漸差。…蛇…亀…鼈。…所獲三物、…皆殺之。（『異苑』巻八）

(36) 武帝時、身毒国献連環羈、皆以白玉作之、瑪瑙石為勒白光琉璃為鞍。鞍在闇室中、常照十餘丈如昼日、……（『西京雑記』巻二）

(37) 昆吾山、…採金鑄之、以成八剣之精。一名拚日、以之指日、則光昼暗、金除物也。除盛則陽滅、…六名滅魂、挾之夜行、不逢魑魅。七名邵邪、有妖魅者、見之則伏。……（『王子年拾遺記』巻十）

(38) 負局先生者、呉郡人、莫知姓名。負石磨鏡。局循呉中磨鏡、輒問人得無有疾苦乎、有即出紫丸赤丸與之服。服薬病無不差。如此数年後、呉有大疫、先生

家至戸到與薬活数万許人。……（『列仙伝』）

(39) 「昔人有遊東海者。既而風悪船漂不能制、船随風浪、莫知所之。一日一夜得至一孤洲。其侶欽然、下石植纜、登洲煮食。食未熟而洲没。在船者斫断其纜、船復漂蕩。向者孤洲、乃大魚。怒掉揚鬣吸波吐浪而去、疾如風雲、在洲死者十餘人。（『西京雑記』巻五）

(40) 『魯迅全集』第八巻『古小説鉤沈』（一九七三年人民文学社刊）所収。上欲浮海求神仙、海水暴沸涌、大風晦冥、不得御楼船、乃还。……（『漢武故事』）

(41) 魏文侯時、西門豹為鄴令。…長老曰『苦為河伯娶婦。』…巫行視人家女好者、云是當為河伯婦。即婢取。…共粉飾之。如嫁女床席。令女居其上、浮之河中。始浮行数十里、乃没。…従是以後、不敢復言為河伯娶婦。…（『史記』巻一二六滑稽列伝）

(42) 道由盧山、子女観於祠室。婢使指像人以戯曰「以此配汝。」…中流、舟不為行。闔船震恐、乃皆投物於水、船猶不行。…使妻沈女于水。…乃復投己女。乃得渡。…故悉還二女。…（『搜神記』巻四）

(43) 蠶保至壇丘塢上北楼宿、…「桐郎、道東廟樹是。」…檻送詣丞相、渡江未半、風浪起；桐郎得投入水、風波乃息。（祖台之『志怪』）

(44) 会稽石亭埭有楓樹。…有估客…載生鱧。至此聊放一頭於朽樹中。…村民見之以魚鱧非樹中之物。咸謂是神、乃依樹起屋宰牲祭祀。…名鱧父廟。…禍福立至。…後估客返見其如此。即取作鱠。於是遂絶。（『異苑』巻五）

(45) 劉開栄著『唐代小説研究』（前掲）二七頁参照。

(46) 汪辟疆著『唐人小説』（前掲）参照。

(47) 『搜神後記』巻一参照。

(48) 『武帝内伝』参照。

(49) 『詩経』『書経』『楚辞』『論語』『左伝』『礼記』『史記』『漢書』『列女伝』『西京雑記』『文選』、また類書『芸文類聚』など、おびただしい。

(50) 『晋書』巻八二干宝伝参照。

(51) 年代、場所、人物、事件を概略して後にそれに対する評価等を付すものが圧倒的に多い。すなわち今日で云うなら興味本位に書かれた比較的程度の低い三面記事に等しい。

(52) 著作郎兼任となり、勅命を奉じて、国史を編纂し、蘇綽の列伝を書くことになった。という一文が本文中に見える。

(53) 汪辟疆著『唐人小説』（前掲）参照。